



## 豪州・東西横断

全長4,352km。オーストラリア最西端の州都パースから東の国内最大都市シドニーまでを結ぶオーストラリア最長となる鉄道の旅、「インディアン・パシフィック」。豪華寝台列車に揺られながら、3泊4日をかけてアウトバックと呼ばれる辺境の荒野をひた走り、西から東へ——壮大な大陸横断の旅が今、始まる。

# 大地を駆ける 列車旅





- 4 美しい朝焼けや夕焼けの車窓風景も見逃せない。
- 5 優雅さが際立つクラシックなデザインの食堂車。
- 6 オーストラリア人が大好きな白身魚バラマンディは白ワインにぴったり。
- 7 チェックインからスタッフが笑顔で迎えてくれる。
- 8 荒涼としたアウトバックの風景が旅心を揺さ立てる。
- 9 お土産に一番人気のステンレス製マグカップは車内で購入可。



にこやかな笑顔で食事をサーブしてくれるスタッフ。



# 西の都から始まる豪州最長の列車旅

## オ

オーストラリア最長の鉄道旅となるインディアン・パシフィックで大陸を横断するために、「パース」に降り立った。

パースは、西オーストラリア州の州都でありながら、人口が集中する東岸の都市と比べると、どこかのんびりとしていてゆったりとした時間が流れている。インド洋へと注ぐスワン川に面したこの街は今、開発が進み、新旧が融合した新たな街へと変貌しつつある。高台にあるキングスパークからパースの街を眺めていると、夕日に反射して東の空に現れる「ビーナスベルト」と呼ばれるピンク色のグラデーションに包まれ、幻想的な光景を見せてくれた。

翌朝、待ちに待ったインディアン・パシフィックに乗車するため、イースト・パース駅へと向かう。午前八時、駅に到着するとインディアン・パシフィックのスタッフが出迎えてくれた。出発まではまだ二時間もあるというのに、続々と乗客が集まってくる。皆、乗車を待ちきれなかったのだろう。

駅の一歩線ホームには、インディアン・パシフィックが停車し、チェックインはその前で既に始まっていた。チェックインを終えた乗客は、モーニング・コーヒーやジュース、パイやタルトなどの軽食が用意された専用スペースで、生演奏とともに朝のひと時を愉しんでいる。演奏が止まり、インディアン・パシフィック総責任者が出発に関するアナウンスをすると、いよいよ乗車だ。乗客たちは待ちきれないとはかりに一齐に立ち上がって列車へと向かい、割り当てられた客車へと吸い込まれていった。

列車は午前一一時きっかりに、イースト・パース駅を出発した。これから三泊四日をかけて、辺境の荒野がどこまでも続く乾燥した大地「ナラボー平原」をとおり、南オーストラリア州の州都アデレードを経由して、シドニーへと向かう。豪華寝台列車の旅は、ゴールドクラス、プラチナクラスともに食事と飲み物、途中の停車地でのエクスカージョンのすべてが含まれるオールインクルーシブだ。煩雑な日常を忘れ、ただひたすら地球が創り上げた壮大な風景を眺めながら、列車に揺られて過ごす休日には、ほかに代え難いとおきの間になるはずだ。

八九〇年代、急速に発展する東海岸と孤立した西のパースを結ぶ大陸横断鉄道は、オーストラリア人の夢であった。当時の鉄道は、東側からはポートオーガスタまで、西側からはカルグーリーまでつなが

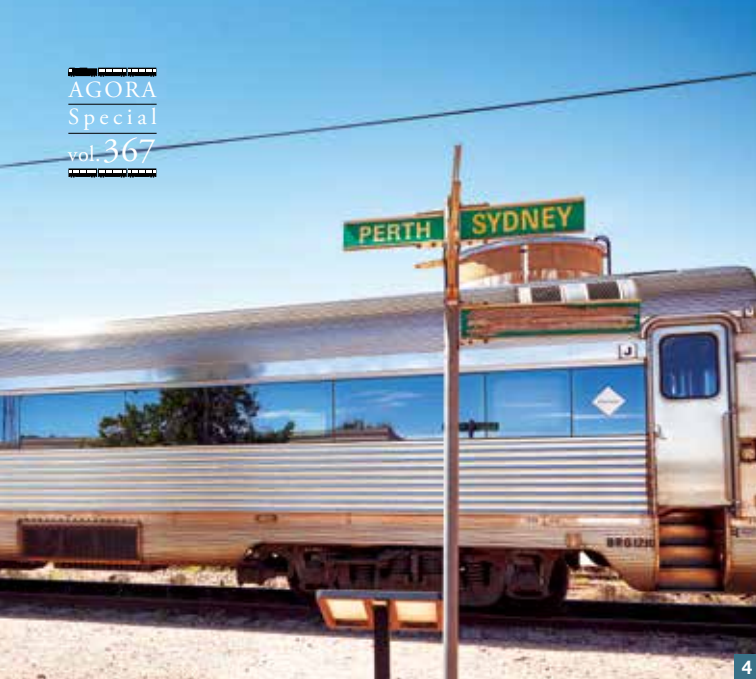
っていたが、この間の約二〇〇kmが空白となっていた。一九二二年、この空白を埋める鉄道建設が両側の町から始まり、五年後にナラボー平原でつながったことで、鉄道による大陸横断が実現。その後、ブローケンヒルをとおってシドニーへと抜ける線路が完成し、これが現在のインディアン・パシフィックのルートとなっている。当初、輸送手段として使われて



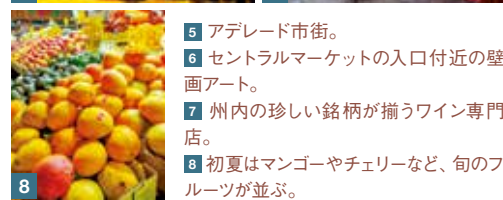
- 1 パースの観光スポット・エリザベスキーにあるベルタワー。
- 2 キングスパークから夕暮れに染まるパース市街を一望。
- 3 スターリングガーデンズに隣接する、西オーストラリア州最高裁判所。

AGORA  
Special  
vol.367





- 1 ナラボー平原の小さな町・クックに停車するインディアン・パシフィック号。
- 2 クックの周囲は、ただひたすら何も無い荒野が続いている。
- 3 駅のプラットフォームがないクックでは、列車からステップを出して乗降する。
- 4 クックに立つ「パース」と「シドニー」を指す標識。



- 5 アデレード市街。
- 6 セントラルマーケットの入口付近の壁画アート。
- 7 州内の珍しい銘柄が揃うワイン専門店。
- 8 初夏はマンゴーやチェリーなど、旬のフルーツが並ぶ。

求めて集まった人々、遥々パースから水を運ぶために尽力した人々に思いを馳せながら、夜のツアーから列車へ戻ると、コンパートメントの長椅子はベッドへと作り替えられていた。今宵は、レールから響いてくる小刻みな音をBGMに眠りにつくとき。

翌朝、目が覚めるとさらに荒涼とした乾燥地帯が広がっていた。車窓からは白く輝く塩湖が見える。ブランチの後、車内アナウンスが州境を通過することを告げ、ほどなくして「クック」に到着。地上に降り立つと、熱く乾いた風が吹き抜けていった。

クックは、内陸部に広がるグレートビクトリア砂漠に接する広大なナラボー平原の真っ只中にある

小さな町で、世界一長い直線線路上にある。直線区間は四七八km。ナラボーとは「木がない」というラテン語に由来する。

昔は鉄道整備の主要拠点だったというが、その役割を終えると町の存在は忘れ去られた。「二〇〇九年には人口四人まで減少しました。今は町というより、集落というほうがふさわしいですね」と列車のスタッフが笑う。そんな辺境の地を訪ね、果てしなく続く荒野のナラボー平原を疾走するのは、この旅ならではの醍醐味だ。また、運行状況によっては、クックの手前で「ロウリナ」という小さな駅に停車することもあるという。

列車は夜の平原をひた走り、翌朝には南オーストラリア州の州都

「アデレード」に到着。市民の台所でもある「セントラルマーケット」のツアーでは、市場内での朝食後、活気溢れる場内の様子を見学できる。色とりどりの旬のフルーツや野菜が並び、ワインやおつまみに最適な惣菜が豊富なのも、国内最大のワイン産地を抱える州ならではだ。

■

デレードを離れた列車は、ワイン産地でもある緑豊かな丘陵地帯を走りながらランチタイムとなる。しばらくすると、再び乾いた砂漠地帯が見えてきた。車窓風景が劇的に変化するのも、オーストラリアという広大な大地を走っていることを実感させてくれる。



鉄道建設の際に砕かれた岩を利用した道標。



## 灼熱のアウトバック、 荒野開拓の 夢を乗せて

いた大陸横断鉄道は、一九七〇年に移動手段として運行を開始。西のインド洋と東の太平洋からその名を取って命名され、インディアン・パシフィックの歴史が始まった。一九九七年の民営化を機に豪華寝台列車として生まれ変わり、それ以来、海外旅行客はもちろん、国民にとっても憧れの寝台列車として定着。今や数カ月先まで予約がとれない人気列車となっている。

車窓に流れる街並みを追い続けていると、ふと空腹を感じ、慌ててランチの時間を確認する。よく磨かれた壁の木目美しい通路を辿って食堂車へと向かうと、ラウンジでは、既に大勢の人がアペリティフを愉しんでいた。食事の前に、ここで一杯やりながら待っているのだ。

食堂車へ足を踏み入れると、高級感溢れるインテリアと真っ白なテーブルクロスが始まったばかりの豪華な旅を予感させる。ランチはメインとデザートに二コース。オーストラリアらしい食材を使った料理は、列車内とは思えないほど凝ったものばかり。料理にあわせるワインは、もちろんオーストラリア産だ。

食事中、相席となった方と会話が弾む。なぜこの列車を選んだのか、訊いてみた。

「車窓にずっと素敵な景色が広が

っているでしよう？ この列車はすべてが旅の一部なの」

車窓風景は、徐々に緑が少なくなっていく、線路と平行して太いパイプがずつとびているのが見える。

「一八九〇年代、内陸部のカルグーリーで金鉱が見つかり、パースから水を運ぶために造られたよ。乾燥地帯で水がないから。今も内陸部の町へ水を供給しているの」

パース出身の方がそう説明してくれた。

太陽が傾き始める頃、お待ちかねのディナータイム。ディナーは三コース。ワインもすすみ、すっかりほろ酔いになった頃、最初の停車地「カルグーリー」へと到着した。ここでは列車を降りて、今も掘削が続く金鉱山や博物館など、町の歴史を訪ねるツアーへ繰り出す。その昔、水のない過酷な地に金を



現在も掘削が続くカルグーリーの金鉱山・スーパースピット。